

坪内逍遙「十銭銀貨の来歴談」にみる翻案と創造

——坪内逍遙『国語読本』から——

間嶋 剛

はじめに

二〇〇八（平二〇）年の学習指導要領改訂に合わせて教科書の改訂が行われ、二〇一一年から小学校、二〇一二年から中学校で新課程の教科書の使用が開始される。教科書改訂は二〇一一年現在、四年ごとに大幅な改訂が加えられているが、振り返れば一八七二（明五）年の学制の開始から多くの教科書が編纂され、使用されてきた。

教科書は時代や社会の文化観、また教育に対する価値観を表現してきた。しかし、時代とともに大きな変遷をたどったのは教科書の知の内容だけではない。同時に、使用者である児童に着目し、知の伝達方法についても様々な工夫が凝らされてきた。

一八八六（明一九）年四月に公布された小学校令の第二三条には、「小学校ノ教科書ハ文部大臣ノ検定シタルモノに限ルベシ」と検定教科書制度の実施について記載がある。以降、一九〇三（明三六）年の国定教科書制度実施までの一七年间、多くの出版社が教科書を編纂する検定教科書時代となる。

「読本」⁽¹⁾だけでもこの時期に二一四種類の教科書が編纂されていた。

金港堂をはじめ文学社や普及舎などの出版社が様々な教科書を出版していったが、一方では批判もあった。この時期の教科書について、長谷川天溪は「小学教科書の欠点（趣味の欠乏）」という題で『読売新聞』に一九〇一（明三四）年五月六日、一三日、二〇日の三回にわたって批判している。

教科書をしては、児童が是を読むと否とに拘らず、先づ手にするを怡ぶほどの物ならざるべからず。然るに今日の教科書は、孰も抹香臭き本の如くにして、而も其内容は、無味乾燥たり。吾人は、斯の如き教科書が、克く児童が好奇心の大部分を引きて、学に入らしむるの能力あるや否やを疑ふ。

天溪はこの批評の中で「愛国心」や「情」についての「知」の内容についても論じているが、児童の興味を惹くことの出来る教科書の必要性をもっとも強く説いている。多く

の出版社が教科書を出版していたがいずれも「抹香臭」い、つまり説教くさいもので、「克く児童が好奇心の大部分を引き、学に入らしむるの能力ある」教科書は少なかったと天溪は感じていたのだ。

天溪の批判とほぼ同時期に編纂された読本が、坪内雄蔵編『国語読本』（一九〇〇・九、富山房）である。富山房の社長、坂本嘉治馬はこれまでとは異なる新しい読本を作るために、その編纂について当時を代表する文学者であった坪内逍遙さんと坪内雄蔵に依頼した。一九〇〇（明三三）年は小学校令が改正された年であり、逍遙の『国語読本』は改正された教育制度に対応している。義務教育は尋常小学校の四年間とされ、その進学先には高等小学校の四年間（共学）、中学校の五年間（男子）、高等女学校の六年間（女子）の三つが設定されていた。このうち逍遙の『国語読本』が使用対象としたのは尋常小学校と高等小学校の二つの初等教育機関である。尋常小学校には『尋常小学校用』八巻、高等小学校には『高等小学校用』と『高等科女子用』の男女別の教科書それぞれ八巻が用意された。巻の中には多少の差はあるが二〇から二五の課がある。

逍遙は読本編纂にあたり『国語読本編纂要旨』（一九〇一・八、富山房）に「直接の目的」と「間接の目的」の二つを挙げた。「直接の目的」は一八九一（明二四）年一月の「小学校教則大綱」に準じたものとなっており、当時求めら

れた教授すべき知の内容について記されている。それは主に「語り」「読み」「作文」の能力、「普遍知識」、「性情陶冶」すなわち倫理教育である。逍遙はさらに「間接の目的」も挙げている。

間接の目的は、生徒をして、読書の利益と興味とを覚らしむるに在り、換言すれば、尋常科読本八巻（高等科を併せて十六巻）を学習し了る頃には、生徒が自然に啓発せられて、読書の利益と面白味とを感得し、不言不語の間に、書籍は知識の倉庫にして、兼ねて慰楽の泉源たることを覚り、やがて、自ら進んで益々読書せんことを欲するに至るやう、彼等が心を誘発するにあり。此の間接目的の大切なるは、他の直接目的の大切なるに聊かも劣らざるべきなり。

「間接の目的」には「読書の利益と興味とを覚えらしむる」とあり、「生徒」が「自ら進んで益々読書せんことを欲する」ように、「彼等が心を誘発する」工夫をすることをあげている。この「間接の目的」こそ長谷川天溪や坂本嘉治馬が教科書に望んだ内容ではないだろうか。逍遙の『国語読本』は教授すべき知の内容だけでなく、児童という読者を意識することで知の伝達方法についてもその重要性に着目していたのである。

本稿では逍遙が児童のための教科書を作るために国内外の先行作品をどのように読み替え、作り替えていったか、その過程を逍遙の読書体験をさかのぼりながら、高等小学校用第八巻、第二・一三課（高等科女子用では第八巻、第一七・一八課）に（上）（下）に分けて掲載されている「十銭銀貨の来歴談」から考察する。²⁾

一 「十銭銀貨の来歴談」明治の『国語読本』

「十銭銀貨の来歴談」は、以下の文章で始まる。

我れ、もとは、但馬ノ国生野の鉾山にありし銀のあらがねなり、先年、掘りとられ、精製せられて、純銀となり、明治廿六年、大阪造幣局につれゆかれて、そこにて、型に入れられ、十銭銀貨といふ名を貰ひ、やがて、数万の兄弟と共に、某銀行に渡されたり。

この冒頭からもわかるように、「十銭銀貨の来歴談」は「十銭銀貨」を語り手とする構成になっている。この「十銭銀貨」が日本中を「人々の手より手へ、渡り歩き」、そこで起こった出来事について、「一々語らんは、もとより難し。今は、面白しと思ひし二三の話ばかりを、語らん」として始まる。

十銭銀貨は「明治廿六年、大阪造幣局につれゆかれて、ここに、型に入れられ、十銭銀貨といふ名を貰ひ」とある。当時の貨幣価値について例をあげると、あんぱん（一個）が一銭（一八八二年）、味噌（一貫〓三・七五kg）が一銭（一八八七年）、理髪料が八銭（一八九七年）となっている。³⁾ 時期によつて若干の変化はあるが、十銭銀貨は庶民や児童の生活に密着した硬貨であつたことがわかる。

十銭銀貨は以下のような話を始める。

二年以前、我れは、某紳士の車代となりて、東京の神田区にて、若き車夫の手に渡されき。さて、其の車夫の腹がけのかくしに入れられてありしが、夕飯後、件の車夫は、衣服を着かへ、破れ袴を着けて、宿を出づ。意外の事かなと思ふうち、とある学校の教場に入りぬ。夜学に通ふなりけり。三時間の後、車夫は、宿へ帰り、ランブの下にて、更に、書物を黙読すること、十二時頃に及びたり。さて、寝に就き、翌日は、朝五時に起き、辻に出でて、車を引きて、終日かせぎ、夜に入れば、また、学校に通ふこと、昨夜の如し。

この「若き車夫」の話を通して語られているのは、中村正直『西国立志編』（一八七・一七）、福沢諭吉『学問のすゝめ』（一八七二・二）からはじまる「学問の奨励」による明

れき。鋭きは、役員の眼なりけり。

治の「立身出世思想」である。このあと「十銭銀貨」は本の代金として「或る書肆」の手に渡ることになるが、「永くこの人の側にありて、その行末をも見たしと思ひ」と語ること、「若き車夫」の将来に期待を寄せている。「苦学」を修めた「行末」から「立身出世思想」、すなわち「学問の奨励」の倫理観を児童は教授されるのである。

また、細かくは描かれないが「十銭銀貨」は上野や福島県会津、秋田、京都、大津など具体的な地名を出しながら、印刷所や農家、散髪屋など様々な場所を巡る。貨幣の流通の広がりや国内の地名を記載することによって、より具体的に示していると言える。

「十銭銀貨の来歴談」(下)では「あやしの貨幣」についても語られる。以下は「呉服屋」で「あやしの貨幣」に出会い、「どこことなく、腑に落ちぬ様子」を感じつつ、銀行に送られる箇所である。

この検査室には、我等の仲間、あまた居たり。大いなるズツクの袋に入れられて、室の隅に集まれり。さて、役員の、我等を検査することの早さは、驚くに堪へたり。つまみて、投ぐるよ、と思ふ間に、検査は終るなり。此の時、彼のあやしの貨幣は、忽ちにして、見咎められ、坂の上に投げいだされしに、その音、甚だ濁りたりしかば、「贋造」と宣告せられて、かたはらの籠に投げ込ま

「あやしの貨幣」とは贋金のことであり、ここではその検査の方法が語られている。明治の貨幣制度は一八七一(明治四年)五月の「新貨条例」から始まった。しかし、国内の紙幣の統一、不換紙幣から兌換紙幣への移行、金本位制度に向けての体制作りなどには数々の苦難が伴い、その歩みは決して平坦なものではなかった。折しも日清戦争後一八九七(明治三〇)年には「貨幣法」による金本位制度が実施された直後である。贋金の検査方法が描かれることで、児童に貨幣の役割やその信用の高さに注意を向けさせることが出来たはずである。

逍遙は東京大学の文学部を一八八三(明一六)年に卒業しているが、専攻は政治学科・理財学科であった。講義も政治や経済が中心でフェノロサから理財学、渋沢栄一から財政論を学んでいる。特に貨幣についての逍遙の関心は高く、在学中から春の屋おぼろの名で『読売新聞』に「貨幣の真理の良訳」(一八八二・九・二六)、「紙幣の講釈」(一八八二・一〇・一)を投稿していることからそのことがわかる。「十銭銀貨の来歴談」の末尾には以下のようにある。

物静かなる地方の人の手に渡り、或は、吝嗇家の庫に蔵められて、何個月も休みある間こそ、なかなかの苦み

ぞかし。我が経来りし数万の人のうちにても、節儉と吝嗇との別を弁へ、よく集め、よく散ずる人は、甚だ少し。而も、その自在を得ねば、財産家にはならぬ、とぞ。こどもたち、よくよく心得たまへ。

「十銭銀貨」は児童に対して節約され、貯蓄されることは貨幣にとって「なかなかの苦み」であると語り、「よく集めよく散ずる」ことの重要性を貨幣の視点から説いている。経済における貨幣流通の重要性が示されているのである。

同時代の他の読本は、貨幣についてどのように取り扱っていたのだろうか。同じ一九〇〇（明三三）年に出版され、「非常に多く用いられた読本」であつた金港堂編『高等国語読本』巻二第二三課より「財を用ふる法」の一部を挙げる。

儉約にして、財を費やさざるは、よきことなり。然れども儉約を行ふに事よせて、財を惜しみて、礼儀を闕き、公益をはからざるは、鄙劣と謂ふべし。是儉約に非ず、吝嗇なり、不徳なり。礼儀を務めて財を用ふべく、与ふべき時ならば、財を惜しまずして、潔かるべし。

「財を用ふる法」も逍遙の『国語読本』と同じく「吝嗇」を戒める内容となっているが、貨幣の流通というよりはその使途を道德的な観点から述べたものとなっている。児童の視

点からすればかなり説教的な文章であつただろう。

「十銭銀貨の来歴談」の最大の特徴はその内容以上に、銀貨が自らの履歴を語ることにある。児童にとっては貨幣が語りかけるという形式によって興味を惹かれ、その内容にも親しみやすいものとなっていたはずである。逍遙の『国語読本』の「間接の目的」が活かされているのもこの語りの形式である。この銀貨が自らの履歴を語るという発想はどのようなして作られたのであろうか。

二 「一円紙幣の履歴ばなし」 —小新聞『読売新聞』の風刺性—

「十銭銀貨の来歴談」と良く似た構成を持つ逍遙の作品がある。一九〇〇（明三三）年二月一日から三月二〇日まで『読売新聞』に掲載された「一円紙幣の履歴ばなし」である。

逍遙と『読売新聞』との関係は深い。逍遙は多くの小説や評論を『読売新聞』の雑譚欄に投稿し、一八八九（明二二）年には正式に『読売新聞』に入社、文芸欄の編集を手がけている。当時の『読売新聞』はいわゆる「小新聞」であり、一般大衆を読者層としたものであつた。逍遙の小説『当世書生気質』にも遊女が『読売新聞』を読む場面が描かれており、その大衆性を良くあらわしている。

逍遙は「新聞紙の小説」という題で一般の小説と新聞紙上の小説の違いを論じている。

蓋し新聞紙の小説は純然たる文学的小説を以て見る可からず。よし美術として欠くるあるも、新聞紙たるの義務、即ち広く益し広く樂ますといふ点に於て本分を尽くす所あらば、十分賞美して当然なるべし。

逍遙は新聞紙が「割合に無限なる讀者を有す」ことに着目し、「広く益し広く樂ます」ことが重要であると説いている。『読売新聞』に連載された「一円紙幣の履歴ばなし」はどのようなものであったか。第一回から第二〇回まで連載したものであるため、「十錢銀貨の來歴談」に比べると非常に長い物語である。語り手が貨幣であることに変わりはないが、硬貨ではなく紙幣となっている。冒頭を以下に挙げる。

吾等文本の門を叩きし上清童子の仙骨無ければ、又スベクターの夢枕に立ちしシリングの洒落あるにもあらず。本来の薄ッぺら、其身貴からざれば、半生の経歴に花も実もあらむ筈なきを、所望せらるればとて、表だちての身の上話し、(略) 過來しかた打明けていうて見たしと思ふなり。物数ならぬ身の上なれど、足下達人間とは離れぬ中の履歴なれば、ききかたに因りてはをかしき節の無きにもあらじ。物を見るばかりが放楽ならず、聞いて置くも損は無しとさとりたまへ。

「十錢銀貨」に比べ、「一円紙幣」は非常に多弁である。「一円紙幣の履歴ばなし」も「十錢銀貨」と同様に様々な場所を巡る。「一円紙幣」は書生や高利貸など様々な人の元を巡るが、特に柿橋先生という借金に迫られる学校の先生と、佐野という既婚の女性とその周辺を取り扱っている。内容の特徴は本文の「心とも無く人間の内緒事、目に触れ、耳に触れ、おのづから知りしも幾そたび」によく現れている。人々の生活に密着し、その欲望や経済活動の中心である紙幣であるからこそ、人の隠された面を見聞きすることができるのだ。

さるは、吾等の貌を見たる時、いくらか喜ばぬものは稀なればなり。但し喜ぶは一つなれど、喜ばぬものは稀なればなり。但し喜ぶは一つなれど、喜ぶ由来には差別あり。老少、賢愚、邪正の相違、其喜びの上にあらはる。爰が吾等の話の種なり。(略) 今の世は人間かしこくなり、守銭奴といはるる向さへ、吾等を吾等としては可愛がらず、便利の道具としてめづるのみ。げに善にも悪にも吾等無うては埒あかねば、吾等のめでらるる故なきにあらず。

「一円紙幣」は自らを「道具」と称し、「嬉しかりし時もあれば、機械と生れ出し悲しさをひとりかこちし折もあり」と

自らの運命を語っている。貨幣の側から人間の經濟活動を對象化し、人々の「喜ぶ」「喜ばぬ」欲望の様を風刺しているのだ。

そこから垣間見える社會問題を紙幣たちが自らの見解を挟みながら物語は展開していく。また「ききかたに因りてはをかき節の無きにもあらじ」と言っているように、滑稽さも大きな特徴である。例えば登場して語るのは「一円紙幣」だけではない。「しゃしやりいで」てくる「芸妓の名刺」や、話が長く聞いている紙幣たちを飽きさせる「守札」なども「一円紙幣の履歴ばなし」には登場する。

加えて「十錢銀貨の來歴談」に無い特徴として、「一円紙幣の履歴ばなし」では持ち主や貨幣たちの會話が頻繁に登場する点があげられる。これは紙幣が基本的には財布等にしまわれているので、音で状況を判断しているという設定ゆえである。「十錢銀貨の來歴談」にはそのような設定はない。

「一円紙幣の履歴ばなし」は「第二〇回」において以下のような形で幕を閉じる。

読者諸君に断る可き事のあり。余が紙幣子の履歴ばなしを筆記して第十回に及し頃同士は二月分に対する日就社（引用者注）『読売新聞』の發行会社）の謝礼として吾等の手へ移りたり。然るに一昨日に及び、余の手元少々逼迫となり同子と別れねばならぬこととなりし（以

下略）

語り手の「一円紙幣」は日就社から給料として「余」に渡っていたのだが、「余」の財政が悪化したため「一円紙幣」を手放すことになってしまふ。そのため「一円紙幣の履歴ばなし」も連載が終了する。もともと話の中で伏線を張りつつもそれを回収しきれずに終わったところもあり、計画通りに書けなかったことが窺われるが、それに対して「併しなから此儘に話を中絶して別るるは、何ぼう口惜しき次第なれば、願はくは我等をして後の目じるしを残させよ」ということで、「紙幣の面に朱筆もて見えぬばかりの小さき点を施」す。

附ていふ此後一円紙幣を手に入れらるる人は注意あれ、朱点は目に見えぬ程小さし。人さへ見ねば可しと思ひ油断あれば、彼れが行く先々の噂の種となるべし。あなかしこ。

作品として未完成である印象は拭えないが、「此後一円紙幣を手に入れらるる人は注意あれ」と、読者の注意を自らの持つ「一円紙幣」へと向けさせることによって作品世界と読者をつないでいる点は興味深い。また、その反響として「一円紙幣の履歴ばなし」の約二ヵ月後の一八九〇（明二三）年五月一〇日から二六日にかけて『読売新聞』に「朱点ある一

「円紙幣」という題で武田仰天子が八回にわたって作品を連載している。その内容は逍遙の「一円紙幣の履歴ばなし」の一週間後に「朱点ある一円紙幣」は大阪までたどり着き、その道程を仰天子が筆記したというものになっており、「一円紙幣」の趣向への興味の表れであるといえるだろう。「小新聞」という媒体からすれば、その風刺性や滑稽性には大きな価値があったのである。「一円紙幣の履歴ばなし」は長さや内容こそ異なるが、形式からして「十銭銀貨の来歴談」に立つ作品とみて間違いない。

三 アディソン「一シリング銀貨の冒険」 ——一八世紀英国新聞の風刺性——

逍遙は「十銭銀貨の来歴談」、そしてそれに先立つ「一円紙幣の履歴ばなし」の形式をどのように作り出したのであろうか。以下は逍遙が『読売新聞』に「一円紙幣の履歴ばなし」を連載していた一八九〇（明二三）年一月一七日の日記である。⁽¹⁰⁾

此夜 アヂソンの adv. of Shilling を読みてフト「紙幣の物語」といふ趣向浮ぶ これは紙幣を主人公にして物いはせ 当時の傾向を写さんといふ趣向也（引用者注——傍線は引用者）

逍遙は「アディソン」の「adv. of Shilling」からその趣向を得たと述べているのだ。

ジョセフ・アディソン (Joseph Addison、一六七二—一七一九) は一八世紀の英国の随筆家・劇作家・政治家である。盟友のステイルの新聞『タトラー (告げ口屋)』を「ガリバー旅行記」のスイフトらと共に手がけ、またステイルと共同で日刊新聞『スペクテーター (観察者)』を発行するなどの業績がある⁽¹¹⁾。「Adventures of a Shilling」(邦訳「一シリング銀貨の冒険」) もアディソンの作である。

逍遙の「一円紙幣の履歴ばなし」の冒頭を再度確認すると、「又スペクテーターの夢枕に立ちしシリングの洒落あるにもあらず」とあり、「一シリング銀貨の冒険」が『スペクテーター』に含まれる作品のように記されているが、『ジョセフ・アディソン作品集 第二巻』⁽¹²⁾によると、「一シリング銀貨の冒険」は『スペクテーター』ではなく、『タトラー』に収録されていたことがわかる。逍遙は前述の日記の中で丸善の『英文十八世紀大家文集』を参考にしたという記述がある。当時、丸善は多くの欧米の書物を輸入販売しており、『英文十八世紀大家文集』もそうした書物の一つだと考えられる。おそらく『スペクテーター』からではなく、『英文十八世紀大家文集』の中から「一シリング銀貨の冒険」を読んだためにこのような間違いが生じたのであろう。

森田思軒が「一シリング銀貨の冒険」を翻訳しているの

で、以下その訳に沿って検討を進める。「一シリング銀貨の冒険」は「十錢銀貨の來歴談」や「一円紙幣の履歴ばなし」と異なり、貨幣の語りからは始まらない。「余」の友人の以下の話がきっかけとなる。

若しこの一二ペニー銀貨（引用者注——シリングのこ）が余等に其の平生を語ることを能くする者ならむには余は思ふ這個が窮蹙したる履歴の半分も亦た以て彼の忙劇者流の履歴を眇視す可きに足らむ

銀貨がもし話すことが出来ればその履歴を知ることが出来るという友人の話を聞いた「余」は、寢床で「ウツツ」の状態でテーブルの上の一シリング銀貨を見つめる。

余はおもへり彼のテーブルの上に在りし一シリング銀貨その縁辺を足として起ちあがり余に面して口を開きおとなしき銀やうの声を発して余に下の如き己の身のうへと履歴とを陳述せり

「余はおもへり」とあることから、あくまで「余」の想像であることが前置きされた上で「一シリング」の語りが始まる。⁽⁴⁾

余は元とペリユー国一小村の傍なる山の腹に生れしがフランシスドレーキ君に護送され銀飯の装ひしてこの英国に渡りしなり

「一シリング」の生れはペルーで、当初は「銀飯の装ひ」、すなわち貨幣に加工前の状態であったが、「フランシスドレーキ」によって英国に持ち帰られ、「本土の民とされて前に女王エリザベスの顔背に国章を描きたる本土の装ひを被せられ」ることによって「一シリング」となる。「フランシスドレーキ」は海賊及び英国の海軍提督で、一五七七年から一五八〇年にかけてマゼランに次ぎ史上二番目の世界一周を遂げた人物である。「一シリング」はその際に英国にたどり着いたとしている。つまり「一シリング」は一五八〇年から始まり、一七一〇年の『タトラ』掲載時までのおよそ一〇〇年の歴史を語っているのである。

「十錢銀貨の來歴談」や「一円紙幣の履歴ばなし」と比較して、「一シリング銀貨の冒険」のもっとも大きな特徴はこの歴史性である。「一シリング銀貨の冒険」はそれほど長い物語ではないが、その中に「英国清教徒革命」の話などがあり、物語を通して英国の歴史の一部を振り返ることができる。これは歴史の浅い近代日本貨幣では真似することが出来なかった点であろう。

では、なぜ逍遙はアディソンの「一シリング銀貨の冒険」

を新聞や教科書に取り入れたのだろうか。以下は逍遙の「ジョセフ、アヂソンの散文」である。⁽¹⁵⁾

就中アヂソンは、其の為人も温厚にして、其の文はた雅馴、喩へば彼の徳川期に行はれし雅俗折衷の文章に似て、平易通俗ながら些も卑野に流れざる所、尤も愛すべし。(略) 最も諷諧の文に長ぜり、面白くをかしく世を諷して、悠々迫らざるうちに、おのづから誨味啓蒙の力ある、実にアヂソンが特詣なり。

逍遙はアヂソンの文章には「面白くをかしく世を諷」する力があり、風刺と啓蒙の魅力があると賞賛している。

アヂソンについては逍遙以外にも論じている作家がいる。夏目漱石である。時代は下るが一九〇九(明四二)年に十八世紀英文学について論じた『文学評論』にその記述が見受けられる。これは一九〇三(明三六)から東京帝国大学に勤めていた際の講義をまとめたものであり、『国語読本』完成の一九〇〇(明三三)年からすればそれほど大きく時代がひらいていない。

この中で漱石は、『タトラ』『スペクテーター』を作ったアヂソンとステイルの文章について中心に言及している。⁽¹⁶⁾

『スペクテーター』『タトラ』『ガーヂアン』めめて

何百号かを読み尽して、あとで何が残るかと考えて見れば分る。勤工場を通り過したようなものである。よくいへば軽い感じがする。綺麗な心持がする。気が利いてゐる。寄木細工の香箱見たようである。悪くいえば、どれも是も土足で踏み壊しても構はないもの許りである。

ただ残るものは、横からも、縦からも、斜めにも見られる広い世界を、ただ道德の二字で貫いて、何でもかんでも道德的に眺めてゐる彼らの平面的眼界、直線の視線である。

漱石はアヂソンとステイルの文章は説明的、また道德的過ぎると批判しており、評価が低い。偶然にも逍遙と漱石はアヂソンの同じ『スペクテーター』一〇二号の文をとりあげて批評している。内容は男性にとつての剣と同じように女性にとつては扇が武器であるから、扇の使い方を指導している学校があるとして、その学校の様子を滑稽に描いた風刺文である。逍遙は「扇子使用法の練習」として翻訳を発表し、その前文において「全体の文詠のうちに多少風刺文の模範とすべきものを発見すべし」と評価している。⁽¹⁷⁾ それに対して漱石は『文学評論』で「一概にいえば下らない」と切り捨てている。⁽¹⁸⁾

漱石の言うように「道德的」であることは逍遙も承知し

ていた。逍遙はアディソンについて、「すなはち世間的道義論にして、哲学としては、高遠ならざること勿論なり」とし、その「平易通俗にして靈妙なる所、実にアヂソンが文章の特質にしてまた十八世紀文学の特質也」と結んでいる。⁽¹⁹⁾この「風刺文の模範」性、そして「平易通俗」さこそ『読売新聞』に、そして『国語読本』に逍遙が取り入れようとしたアディソンの特質ではないだろうか。「一シリング銀貨の冒険」の風刺性は、銀貨が英国の歴史を貨幣の視点から対象化している点にある。読者は「一シリング銀貨」の語りによって歴史を捉え直すことが出来るのだ。

逍遙はアディソンの「一シリング銀貨の冒険」を貨幣の語りによる風刺性を活かし、新聞に、そして教科書に翻案したのである。

四 唐来参和「再会親子銭独楽」

— 逍遙の読書体験とその広がり —

逍遙はいかにしてアディソンの「一シリング銀貨の冒険」を自身の「一円紙幣の履歴ばなし」に取り入れるに到ったのか。前述の逍遙の日記には続きがある。⁽²⁰⁾

要するに東萊三和とアヂソンをしッぱくにしたやうなものを作らんとせし也（傍線は引用者）

「東萊三和」とあるが、正しくは近世に活躍した戯作者、唐来参和のことで、「しッぱくにした」とは日本化させるという意味である。逍遙は「翻案につきて」で以下のように述べている。⁽²¹⁾

我れは以為へらく我が国の場合にていはば事をも人も、厳密に「日本化」^{ニホンナイズ}することは翻案の最要義なりと精しくいへば第一作中あらはるる人物をして性習所為悉く日本的たらしむべし第二作中の事件をして悉く日本的たらしむべし第三事件の連絡感情徳操其の他一切をして厳密に日本的たらしむべし

逍遙にとって翻案とは、「厳密に日本的たらしむ」ことであり、良い翻案の価値を積極的に肯定している。逍遙はアヂソンの「一シリング銀貨の冒険」を、近世の戯作者である唐来参和の作風を混せて日本風に翻案したのである。なぜ数ある戯作の中でも唐来参和の作風を逍遙は挙げているのであるのか。

唐来参和（一七四四—一八一〇）は近世を代表する黄表紙・洒落本作家で、代表作には『莫切自根金生木』^{きんぎょのねからかねのなるき}や『和唐解珍』^{わとうかいしん}などの作品がある。作家の井上ひさしは唐来参和の生涯を扱った作品を手がけたことがあるが、中野三敏との対談⁽²²⁾

の中で唐来参和の『世上廻親子銭独楽』という作品に言及している。『世上廻親子銭独楽』は近世の戯作作品を集めた一九〇一（明三四）年刊行の『黄表紙百種』⁽²³⁾に収められた作品の一つで、正式な名称は一七九三（寛政五）年刊行の唐来参和『再会親子銭独楽』という親子の銭を主人公とした作品である。井上は対談において、『再会親子銭独楽』について以下のように述べている。

それで明治になりまして、坪内逍遙がその唐来参和を読んでまねしたと思うのですが、新しく明治になってお札が刷られますけども、そのお札の親子の話でやつていくんですね。

「坪内逍遙がその唐来参和を読んでまねした」作品とは、逍遙の「一円紙幣の履歴ばなし」にほかならないであろう。ただ、井上は「お札の親子の話」と述べているが「一円紙幣の履歴ばなし」には紙幣の親子は出てこない。後述する『再会親子銭独楽』の設定と井上が混合して語ったものと考えられる。

『再会親子銭独楽』の版元は鳶屋重三郎、画工は北尾政美で、黄表紙仕立ての三冊本（上・中・下巻に分けられている）と、袋入一冊のものがある。

作品の序は以下のようなものである。⁽²⁵⁾

夫銭は。萬宝の親分なれば。人はを立て王老とよび。親愛する事兄貴の如くなればとて。孔方兄と号す。銭精自称の上清童子は。さしづめ息子の番にして。俱に親子兄弟の有名。爰に記す子母銭は。青蚨の血筋を引て。あまねく世上をめぐる中にも。親は子を尋子は親を慕うふて相会す始終を趣向として

唐来参和四五年ふりて筆を採

銭が「萬宝の親分」であると述べ、銭の精霊である「上清童子」と「青蚨」の話から銭に関する伝説について言及し、その親子の再会を主題にしているとある。この箇所は前述した「一円紙幣の履歴ばなし」の冒頭部分「吾等文本の門を叩きし上清童子の仙骨無ければ、又スペクターの夢枕に立ちしリングの洒落あるにもあらず」と対応しており、「文本の門を叩きし上清童子」とは、『再会親子銭独楽』に登場する銭の親子であると考えられる。

作品の筋は、説教節の「さんせう太夫」を下敷きにしており、北の方・安寿・対王丸の離散と銭の親子の離散を重ね合わせている。銭を擬人化しており、挿絵には身体が人間で顔が銭として描かれているため非常に滑稽で面白い。

『再会親子銭独楽』の冒頭では「さんせう太夫」の親子離散と銭の母と姉弟の離散が描かれる。以下は銭の親子が銭の



図1 唐来参和『再開親子銭独楽』
(早稲田大学中央図書館蔵)

精霊となつて現れる場面である。

四文銭は母となり、耳白が姉、銚銭が弟となりて子母銭の精現れ親子の別れを悲しむ。もつとも人の目には見へず。

それぞれ母が「四文銭」、姉は「耳白」という良質の一文銭、弟の「銚銭」は質が悪く価値の低い一文銭として描き分けられている。また「もつとも人の目には見へず」とあり、

それぞれの
場面で一般の
人間と一緒に
銭の親子は描
かれていたが、
精霊であるた
めか使用して
いる人間には
普通の銭とし
てしか認識さ
れていないの
も大きな特徴
である。銭の
親子の離散の

際の会話を以下にあげる。

(母銭)「親子は一せん一門一家今日ちりぢりに立別れ、
またいつ会ふ事じややら。ホンニはかない縁じや
ナア。」

(姉銭)「母様さらばさらば。弟さらばさらば。」

(弟銭)「おいらは車に乗つておぢさんと遊びに行く。面
白ひ面白ひ」

親子の銭は離散ののち、母銭は姉弟の銭を探す旅に出る。
当時銭は貨幣としてはもちろん、庶民生活の中で様々な用途
に用いられていた。『再会親子銭独楽』で描かれる例をあげ
ると、姉銭は子供の遊び道具として銭独楽となったり、弟銭
は風鈴の「舌」と言われる部分に使用されたり、母銭は「四
文銭」特有の波模様のために盥につける焼印として用いられ
たり、滑車の代用にされたり、大願成就に用いられる銭塔に
されたりなど様々である。親子の銭達は銭の視点から庶民生
活で用いられることへのそれぞれの想いを語っていく。

『再会親子銭独楽』は「四文銭は船便りに佐渡が島へ渡り、
情けあるものの施しにて粟の鳥追ふ小屋にまします北の方の
手に渡り、銚銭は袖乞となつて落ち玉ひし対王丸の手に入り、
耳白はどういふ事にてか安寿姫に拾はれ」ることによって、
親子の銭が「さんせう太夫」の三人と同時に再会を果たすこ

とで閉じられる（図1）。

（母錢）「兄弟嘆くな。穴さへあれば親子三人寝て暮らすぞ。」

（姉錢・弟錢）「もう是から三文鑄び付いて離れますまい。」

『再会親子錢独楽』の主題はその風刺性と滑稽性であろう。錢の様々な用途が描かれるのも、知識伝達のためではもちろんない。普段庶民が意識しない日常生活を、錢の視点から見つめ直すことによって、風刺性と滑稽性をもつて生まれ変わらせているのである。貨幣の視点から人々の生活を対象化する点においては、「一シリング銀貨の冒険」と同様である。

近世の戯作作品の中にはものを擬人化して登場させる作品が多くあり、逍遙はそうした近世戯作の方法について熟知していたはずである。逍遙は『少年時に観た歌舞伎の追憶』において、名古屋にいた少年時代、大惣という貸本屋で近世の文学に親しんだことを回想している⁽²⁶⁾。

大惣は、先方が無意識であり、不言不説であったのだが、私に取っては、多少お師匠様格の働きをしていたといつてよい。とにかく、私のはなはだ粗笨な文学的素養は、あの店の雑著から得たのであって、だれに教わった

のでもなく、指導されたのでもないのだから、大惣は私の芸術的心作用の唯一の本地、すなわち『心の故郷』であったといえる

大惣での近世文学の体験は逍遙の文学的素養の根幹を成すものであった。逍遙の東京大学時代からの友人である市島春城（謙吉）は「明治文学初期の追憶」において以下のように回想している⁽²⁷⁾。

ある時坪内君に示された小説目録、それは読み本洒落本人情本草双紙の類まで千種以上も収めたものであったが、何んの目録かと聞いたら、郷里にある時名古屋の大惣（貸本屋）から借覧した書名の大略を書き記したのであると聞き、その涉猟の広ろいのに一驚を喫した。

この逍遙の読書体験が見出した作品こそ『再会親子錢独楽』であった。「一シリング銀貨の冒険」と『再会親子錢独楽』は作品における貨幣の擬人化という共通点を持ち合わせていた。『再会親子錢独楽』のもつ滑稽性、「一シリング銀貨の冒険」におけるアディソンの風刺性を掛け合わせ、翻案することによって逍遙は新しい明治の新聞小説、教科書の課へと生まれ変わらせたのである。

江戸から明治へと移り変わる特異な時代の転換期に生まれ、

その興味を江戸戯作から英文学に広げていった坪内逍遙。その読書経験があったからこそ、異なる時代と文化の作品を結びつけ、滑稽性と風刺性を備えた貨幣の一人称語りという形式の作品を創造することができたのだ。それこそが明治の庶民を啓蒙する目的があった新聞小説「一円紙幣の履歴ばなし」であり、そして児童を読者としてもつ教科書の課である「十銭銀貨の来歴談」であったのである。

評論家の木村毅は一九〇〇（明三三）年、尋常小学校三年時に逍遙の『国語読本』で学んだ生徒の一人だ。木村は『国語読本』を画期的な教科書で「教える先生が非常に面白がつて、むちを振りながら教えてくれた」と評するが、「この読本は内容があまりにも進歩的だったので、新潟県と京都府、岡山、鹿児島⁽²⁸⁾の四県しか使わなかった」とも回想している。一九〇三（明三六）年には教科書国定制の開始により、小学校の教科書は全て文部省制に統一される。逍遙の『国語読本』もいわば「幻の教科書」となってしまう。

しかし、『国語読本』の課の中にはその後の教科書に採録されていたものも多い。梅澤宣夫の教科書へ採録された逍遙作品に関する詳細な研究によれば、「十銭銀貨の来歴談」のその後の教科書への採録は一四種類に上り、「十銭銀貨の来歴談」は決して一部の児童のみが触れた作品ではなかったことがわかる。

逍遙の読書体験による翻案と創造が作り上げた貨幣による

一人称語りの形式は、教科書作品として広く児童に伝わっていったのである。

付記

本稿を執筆するにあたり、『国語読本』の資料は早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵のものを使用させていただきました。貴重な資料を利用して下さったことに改めて感謝いたします。

なお、本稿は二〇一一年度早稲田大学国語教育学会学生会員研究発表会の口頭発表を基にしています。発表時に貴重なご教示を下さった方々に感謝いたします。

注

- (1) 仲新「教科書史」（『教育文化史大系Ⅱ』一九五四・七、金子書房）。
- (2) 本稿における「十銭銀貨の来歴談」の引用は坪内雄蔵『国語読本』（訂正四版 一九〇一・八、富山房）を用いた。
- (3) 『物価の文化史事典』（二〇〇八・七、展望社）。
- (4) 柳田泉『明治文学研究第一巻 若き坪内逍遙』（一九六〇・九、春秋社）。
- (5) 海後宗臣編『日本教科書大系 近代編 第六巻』（一九六四・四、講談社）。
- (6) 「財を用ふる法」（金港堂編『高等国語読本』一九〇〇・一二）の引用は注5による。
- (7) 先行する教科書にあらわれる物の一人称語りについては、文部省『尋常小学読本 卷之六』（一八八七・五）の第六・七課に「水の周遊」がある。「吾は水の一滴にて」から始まり、泉

から海までの道程を説明している。

- (8) 坪内逍遙『当世書生気質』(一八八五・六―一八八六・一、晩青堂)の第十五回に描かれている。

- (9) 坪内逍遙『新聞紙の小説』(『読売新聞』一八九〇・一・一七、一八)。

- (10) 『逍遙日記 明治二十三年の巻』(逍遙協会編『坪内逍遙研究資料 第三集』一九七一・一二、新樹社)。

- (11) *The rattle* [with R. Steele] (1709-11) *The Spectator* [with Steele] (1711-14) (笠原勝朗『最新イギリス文学史年表―翻訳書・研究所列記』(一九九五・六、こびあん書房)のアディンソンの項目より抜粋)。

- (12) Hurd, Richard and Bohn, Henry, G. *The Works of Joseph Addison* vol. 2. London, George Bell and Sons, 1899 この作品集による『Adventures of a Shilling』は一七一〇年十一月一日の『*The rattle*』第二四九号に掲載されたとある。

- (13) 森田思軒『「シリリング銀貨の履歴」(『国民之友』一八九三・一、民友社)。

- (14) 英文では『*Methodists*』。英文は注12による。

- (15) 坪内逍遙『ジョセフ、アザソンの散文』(『国学院雑誌』一八九五・九、国学院)。

- (16) 夏目漱石『第三編 アチソン及びスチールと常識文学』(『文学評論』一九〇九・三、春陽堂)より前半の引用は「『常識』後半は「『一 訓戒的傾向』から。引用には『漱石全集 第一五巻』(一九九五・六、岩波書店)を用いた。

- (17) 坪内逍遙『扇子使用法の練習』(『早稲田文学』一八九三・一〇、東京専門学校)。

- (18) 注16より「三 ヒューモアとウィット」に「扇運動」として言及がある。

- (19) 注15による。

- (20) 注10による。

- (21) 坪内逍遙『翻案につきて』(『早稲田文学』一八九五・九、東京専門学校)。

- (22) 井上ひさし『唐来参和』(『中央公論』一九七九・二、中央公論社)。

- (23) 井上ひさし・中野三敏『言葉と制度』(『国文学―解釈と教材の研究』一九八二・三、学燈社)。

- (24) 鈴木利平編『黄表紙百種』(一九〇一・七、帝国文庫)。

- (25) 『再会親子銭独楽』の引用は鈴木俊幸『唐来三和』(一九八九・六、おうふう)に依った。

- (26) 坪内逍遙『少年時に観た歌舞伎の追憶』(一九二〇・一二、日本演芸出版部)。

- (27) 市島春城『明治文学初期の追憶』(『早稲田文学』一九二五・七、早稲田文学社)。

- (28) 木村毅『「国語読本」のことなど』(『現代文学大系 第一巻』一九六七・一〇、筑摩書房)。

- (29) 木村毅は「新潟県と京都府、岡山、鹿児島は四県しか使わなかった」としているが、中村紀久二『明治検定期教科書採択府県別一覽明治三三年八月「小学校令施行規則」制定以後』(一九九六・三、教科書研究センター)によれば、尋常小学校用が、新潟、福井、山梨、京都、岡山、山口、熊本、大分、高等小学校用が、北海道、新潟、福井、京都、山口、高知、大分、鹿児島それぞれ八県で採用されていたことがわかる。

(30) 梅澤宣夫「坪内逍遙と教科書(3)」(『坪内逍遙研究資料第
十四集一九九二・四、新樹社』)。

*旧字体は適宜現行の字体に改め、特別な事情のない限りルビ・
傍点は省略した。

(まじま・ごう／早稲田大学大学院)